

■ マラー／交響曲第 5 番嬰八短調

マラー (1860-1911) は周知のとおり、「交響曲作曲家」として歴史に名を残している。しかし、その発想は本来、交響曲の枠組みに収まるものではなく、むしろ、つねにそこから離れていく自由な発想や発見に満ちている。実際、どの交響曲をとっても歌や合唱が入ったり、楽器編成が肥大化していたり、楽章構成が特殊など、ウィーン古典派の残した基本形態を逸脱したものばかりである。

1970 年代には世界的にマラー・ブームが起こった。かつて渡辺裕氏は『聴衆の誕生』という著作のなかで、多くの演奏会やCDでマラーの交響曲が取り上げられてファンを生んでいる現象を読み解き、集中して分析的に耳を傾ける従来の聴き方が崩壊して、「軽やかな聴衆」が誕生したのだと論じた。しかし、ブームから 40 年以上の歳月が過ぎてみると、聴衆は新たな成熟を迎えていて、随所に亀裂が入り、迷路のように仕組まれた交響曲のロマンティックな部分だけを聴きかじる気まぐれな聴取は下火になっている。いまやファンの多くはマラーの交響曲の孕む壮大なドラマ、つまり、長い時間をかけて彷徨っていく音楽の変転を、十分に楽しんでいる。

それはもちろん、マラーの作品そのものが求めている聴き方であった。彼は黄昏時の残照のように美しいアダージェットの世界にひたりきってしまうことはできず、安らぎの地を求めて放浪するという自らの運命を、交響曲に託して描いていく。さまよったあげくによろやくたどりついたかと思ったら、それは幻のようにはかなく、かりそめの休息にすぎないことを悟る。こうして彼の交響曲はたくさんの要素が混在し、あたかも作曲家の深層心理を映し出すかのような複雑繊細なストーリーを展開していくのである。

演奏に 1 時間あまりを要するこの交響曲は、5 つの楽章から構成されている。トランペットの独奏ではじまる第 1 楽章は「葬送行進曲」。この序奏のファンファーレは第 4 番の第 1 楽章に姿をみせていたもので、マラーは第 4 番の続編として第 5 番を書いたのかもしれない。死者を送る苦痛や絶望感が全体を覆い、行進曲の間に挟まれた 2 つのトリオにも陰鬱さ、諦めが感じられる。死がぽっかりと口を開いたグロテスクな世界。どこにも救いがないまま、第 2 楽章となる。安定のない混乱した楽想が支配的だ。規模の大きなソナタ形式がデフォルメされ、第 1 楽章の素材から派生したモチーフを含んでいる。終わり近くにコーラルが響くのだが、まもなく第 1 主題にかき消されてしまう。この 2 つの楽章が交響曲の第 1 部。勝利はまだまだ遠い。

800 小節を超える長大な第 3 楽章スケルツォが交響曲の第 2 部である。スケルツォというと、軽やかで気分転換となるユーモラスな楽章といったイメージが強いが、ここでは生の喜びが陽気に力強く、ほとんど荒々しいまでの勢いをもって展開されていく。人々の朗らかな暮らしを思わせるボヘミア民謡が引用されるものの、どこか屈折したニュアンスも感じられる。暗い影を帯びたトリオが挿入されるが、それも束の間、多種多様な楽想からなる慌しい音楽が続き、騒然としたクライマックスへと向かう。

ヴィスコンティの映画でおなじみの第 4 楽章アダージェットは、ハープと弦楽器のみで奏でられていく静かで安らかな音楽である。ここからが交響曲の第 3 部。うっとりとした表情をたたえて、穏やかな時が刻まれる。

第 5 楽章ロンド・フィナーレはホルンの合図ではじまり、木管群が加わって、いくつかのモチーフが導入される。《子どもの魔法の角笛》の「高い知性への讃歌」も引用されている。フーガが 6 回ほど繰り返され、第 2 楽章で姿をみせたコーラルも、ここで全容を現す。激しい高揚とほとぼしる生命力を印象づけて、最後は華やかな勝利を演出する。しかし、余韻からさめてみると、闘争から勝利へという伝統的な交響曲の図式が、じつはパロディックに扱われていたことに気づかされる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。